

追想の関場保・名誉教授

吉 田 忠 雄

1. 若き日に

わが恩師の関場保・明治大学名誉教授は、5月10日に逝去された。85歳のご高齢であった。私がお会いして、およそ40年間、親しく指導を受けた恩師である。明治大学での後継者であった私は、公私共に親しく指導を受けた。在りし日の関場先生をしのびながら追想してみたい。

関場先生は、明治35年11月12日、札幌市郊外の山鼻村で、父・関場不二彦、母島寿の三男として生まれた。長男、次男は夭折され、実質的には初子のように育てられたという。関場先生は、折にふれて父君について語られていた。偉大なる父君であった。

先生の祖父は、会津藩士であった。慶応4年8月の会津若松城の戦いに参加されたという。生き延び、東北地方に移されて苦汁をのまされる生活であった。その中で、父君の不二彦氏が生まれ、育っていったものであろう。

関場不二彦少年は、心身共に優れた人であつたらしい。やがて東京帝国大学医学部を卒業されて研究生活を送っていたが、新天地を求めて北海道に渡られた。そこで、島寿という佳人と出会う。その佳人こそわが保先生の母君となられるのである。

関場不二彦氏は、明治25年前後、公立の札幌病院で医師として勤めておられたようだが、やがて北辰病院を創設され、全国の医師からも尊敬される医学界の重鎮となられる。

明治29年に公刊された『あいぬ医事談』（東西書屋蔵版）があるが、著者は医学士・関場不二彦となっていて、緒言の中に、札幌病院内に於て、とある（幸いなことに、本書は、河野本道選『アイヌ史資料集』第3巻に収められて、

昭和55年、北海道出版企画センターから復刻された)。綿密な考証と優れた観察が本書の中に見られ、名医としての一端を知ることができる。

父君の不二彦氏のプロフィールを知るものとして、三浦綾子さんの小説『塩狩峠』がある。その中で、不二彦氏が登場してくる。おかみの談話として「北辰病院の関場不二彦と言え、だれも知らぬ者のないほど有名である。脈をとってもらっただけで、病気がなおるといふ患者もあった」と描かれている。

偉大なる不二彦氏を父としたわが関場先生は、優しく美しい佳人を母とされた。だが、母君は、わが関場先生の少年時代に世を去られた。関場先生は、父君から受け継いだ龍大な書籍に囲まれた生活を晩年に送られたが、大きな机の上には、若くして去った美しい母君の写真をいつもおかれていた。

このようにわが関場先生は、最高の医師の三男として生まれたのだが、少年時代もその後も病弱であったという（晩年のご長寿は気力によるもののようにあった）。保先生の少年時代、兄二人は夭折されてはいたが、姉、弟、妹と、多くの姉弟妹に囲まれて育てられた。

ご両親の慈愛を一身に受け、なにひとつ不自由のない豊かな生活の中で成長されたわが保先生ではあったが、母君を喪われ、ご自分は身体が頑健ではなく、時には学校も休みがちであったらしい。中学校まで、札幌ですごされた。

さて、いよいよ進学となったのだが、わが関場先生は地元の北海道大学を希望されたという。しかし、病身の若き日の関場先生には試練が待ち受けていた。暗く、苦しい青春時代であったと、私に語られた。しかし、若き日の試練があったからこそ、関場先生は後に重責をはたされたのであろう。

苦悩の若き日、お姉さんの夫君が、わが明治大学出身で、明大を志望することを強くすすめられた。そこで明治大学に入学されることとなった。縁というべきであろう。ふとした小さなことが、人生の大きな意味を持つ。

昭和5年春、関場先生は明治大学政治経済学部を卒業された。学生時代の親友は多く、米子市の商工会議所の会頭であった坂口平兵衛氏など、終生かわらぬ友情が交わされた。よき学び、よく遊ぶ青春の日々を過ごされたとお聞きしたものである。

明治大学卒業後の進路について、関場先生の志は早くから決まっていたようである。研究者への道である。父君からゆたかな教養を受け継がれ、母君から情感豊かなものを受け継がれた関場先生は、明治大学に研究者として残り、やがて教鞭をとることが希望であったと思われる。当時、研究者となる道は、外国、とくに欧米諸国に学ぶことが条件となっていた。事実、日本中の学者は、主として欧米諸国に学び、知識を吸収し、それを日本の土壤に芽生えさせていた時代でもあった。明治大学も例外ではない。

かくて、関場先生も、明治大学から命ぜられて、経済統計学研究のため、ベルリン大学に留学されることとなった。海外研究の辞令が出たのは、昭和5年5月となっている。

関場先生が日本を離れてドイツに向かわれたのは、この年の9月のことであり、南まわりの客船で港々に停泊してゆく、ゆったりとした船旅であった。ベルリンに着いた時、すでに秋は深まっていた。

昭和5年12月から翌年7月まで若き日の関場先生はベルリン大学付属ドイツ語専修学校に学ばれた。関場先生は、外国語に特に長ぜられ、ドイツ語もマスターしておられたであろうが、本場のドイツ語に接した若き日の関場先生は、随分苦労されたものと推測される。

昭和6年11月、ベルリン大学哲学部国家科学・社会科学部に正式に入学された。当時、異国の学生が、ドイツ最高の学府のベルリン大学に正規に入学できるということは、関場先生の並々ならぬご努力があったことを感じさせる。そして昭和8年7月に同学部を修了されるが、関場先生が学ばれた講座は、ゾムバルト教授「特殊経済学」、ワーゲマン教授「経済組織と世界経済の危機」、オットリエンフェルト教授「経済理論」、ヘルクナー教授「貨幣・金融の一般経済学」、ローレンツ講師「経済統計と財政統計」などであった。そして、ゼミナールには、ゾムバルト教授とローレンツ講師のものに参加された。特に、ゾムバルト教授のゼミナールからは多くのものを学ばれ、関場先生の学問的血肉となったようである。

日本を発って、早や3年の歳月で流れていた若き日の関場先生は、こうして

ドイツ文化とドイツ流の学問を身につけて、昭和8年8月に帰国の途につき、9月には日本に着いた。母校・明治大学は、ベルリン大学帰りの若き関場先生を待っていた。

2. 教壇に立つ

昭和9年5月、関場先生は明治大学講師に就任された。最初は、ドイツ外書講読を担当されたというが、関場先生のベルリン弁の美しいドイツ語は、すばらしい印象を与えたはずである。後年の私は、しばしば、関場先生がドイツ人とドイツ語を話す場面に接したが、同国人同士が語りあっているかのようなすばらしいものであった。

この年の10月、かねてから知りあっていた須美子夫人（旧姓・高田）と結婚された。そして六男一女の子福者となられた（惜しくも、三男の令息を戦時中の疎開先で喪われた）。須美子夫人は、明治時代の末に米国で育ち、日本で教育を受け、戦後、明治大学短期大学の講師、助教授となり、人口論に興味を持たれ、翻訳書を公刊されるなど、才色兼備の賢夫人の誉れ高く、熱心なカトリック信徒であったが、惜しくも昭和40年に昇天された。

戦時色が日一日と濃くなる中で、関場先生は、昭和12年に専門部政治経済科助教授となり、17年には教授に昇格された。

この当時、第2次世界大戦は激しくなりつつあった。明治大学にも、学徒動員があり、さらに在學生は次々と戦場に赴いていった。関場先生は、もともと虚弱な体質であったようだが、非常事態の中で、多数の学生を引卒して、関東や中京地域に動員されていった。満足な食事もとらず、学生と共に働き、起居を共にされたという。あの虚弱な体質で、よく生き延びられたと思うのだが、精神力でカバーされたものと思う。

戦争が激しくなり、東京も空襲に見舞われるようになると、お家族は、須美子夫人を中心にして会津地方に疎開された。そして、関場先生は单身生活を送り、学生と起居を共にされた。その留守中に、三男を亡くされたのである。薬さえ十分にあったなら、と関場先生は時折もられ、死児の齢を数えられてお

られた。やがて第2次大戦は終わった。

3. 中堅教授時代から定年まで

敗戦は、日本人の多くを虚脱状態にした。明治大学では、幸いなことに戦災をまぬかれることができた。食べものも、燃料も、電灯も十分ではない中で、大学は再開された。

その中に、若き教授、関場先生があった。生活苦に追われ、食料も、衣類も、燃料もすべて不自由な中で、関場先生は『統計学要論』（北路社刊）を昭和21年2月に、『統計学講義案』（北路社刊）を23年5月に、『一般経済史講義』（三揚社刊）を25年3月に、それぞれ公刊された。

私が一学生として関場先生の講義を聴いたのはその頃である。統計学と一般経済史の講義とドイツ語外書講読を担当されていた。

当時の関場先生は、古武士のような風格があった。今思うと、40歳代半ばであった関場先生であったが、年齢不詳の老大学に映じた。統計学については、統計学史が殊に詳しかった。一般経済史については、ヨーロッパ中世史が印象的であった。そして、ドイツ原書は、美しいドイツ語の発音で、懇切に指導されたのである。不肖の私は、それらのどの分野においても、到底及びえない優雅で気品に満ちた講義であった。

私が人口論研究に特別の興味を持っていることを申し上げると、殊のほか喜ばれ、指導して下さいました。私の大学院学生時代、講座の関係で直接のご指導を頂けず、私は、藤本幸太郎先生（統計学）の下で学んだが、大学院を修了した私を、後継者として、助手に指名して下さいましたのである。昭和29年春のことである。

関場先生は、当時、錚々たる大家がおられる中で、中堅教授として活躍中であつた。昭和28年に経済学科長、30年に教務主任、31年には政治経済学部長に選ばれた。54歳になろうとした直前である。そして、それからおよそ3年間、学部長の激職をつとめられたのである。その間に私は、助手、専任講師、助教授をへて、昭和40年に教授に推薦していただいたが、文字どおり、関場先生の

激務の間に推薦していただいたことである。関場先生の54歳から56～63歳頃までである。

その間にわが政治経済学部は充実され、スタッフも講義もふえ、今日見られるような形がととのえられた。このように政治経済部発展の最大の功労者の1人は、わが関場保先生だったのである。

激務の中で、関場先生は、明治大学評議員（昭和34～47年）、駒沢大学非常勤講師（明治28～36年）、文部省経済学・高学視学委員（昭和40～46年）などもつとめられ、昭和48年3月、明治大学を定年で退任されたのである。

老年の功績に報いるため、わが明治大学は、関場先生を昭和48年4月、明治大学名誉教授に推薦し、翌49年4月、政府は関場先生に勲三等旭日中綬章を授けられた。

明治大学定年後の関場先生は、昭和43年以降、非常勤講師をつとめられていた和光大学教授に昭和48年4月以降就任され、亡くなられる本年3月まで勤められたと聞く。生涯現役だったのである。幼少時代、あれほど虚弱であった先生が85歳まで見事に生き抜かれ、惜しまれつつ逝去されたのである。身の整理はほとんどすべて自分でされ、お亡くなりになる直前まで、端正な生活を送られたのである。

関場先生の私生活は、チリー一つないような端正さで整理されておられたようだが、いつもおしゃれで、清潔で、優雅であった。そして和漢洋の教養に通ずる香り高い気品をそなえられていた。ドイツ留学時代、日本の貴公子と評されていたというが、その端正な生活態度は、終生変りはなかったように思う。和漢洋の詩歌や文学を愛された関場先生は私に学問の他にも、ツワイクの作品や唐詩なども語り、教えて下さった。

さらにまた、関場先生は、明治大学の書道部長と弓道部長をも永年つとめられた。

書道は、父君ゆずりの美しく格調高い筆跡となって結実していたし、弓道は、少年時代に身体を鍛えるために習われたと聞いたが、いつも胸を張られたような見事な姿勢は、この弓道の鍛錬に起因しているのかもしれないと思った。

要するに、文武両道の関場先生だったのである。

4. 社会統計学の拡充

その関場先生が残された学問的業績は、社会統計学である。

現代の統計学は、英米流の数理派に占められているが、統計学は学際科学で、社会科学の領域をも持っているはずである。かつてドイツで栄えた社会統計学である。それを受け継いだ関場先生は、現代の統計学を決して否定することはなく、むしろ包括した形で、社会統計学を主張された。

その内容は、昭和31年に公刊された『社会統計学序説』（明大出版部刊）で見ることができる。関場先生は寡作で、著作としてはこの本が最後となっているが、本書の中には、社会統計学を主張し、ドイツを中心とした学風に裏打ちされた思想と論理が盛り込まれている。しかもそこには、私が専攻してきた人口論も包摂されていたのだ。

明治大学政治経済学部で、人口論の講座を復活させ、はじめに南亮三郎先生に担当していただき、後に私が引き継ぐようにして下さったのは、学部長時代の関場先生のご配慮である。

私は、関場先生のお供をして、学会出張、調査旅行などで、多くのところに旅した。また、私の助手時代はもちろんのこと、講師、助教授の時も、関場先生が激務の時、代ってゼミナール旅行に行ったこともあるし、あるいは、ご一緒したこともある。

アルコール類を一切口にしない私に対して、関場先生は、若い頃の自分もそうであったと言われて、少しも私に強要されることはなかった。一緒に旅して、ほんとうに無粋なことであったと今になって思う。旅の中で、最も喜ばれたところは、山形県の温海温泉と金沢への旅ではなかったかと思う。10年、20年を経た後もあの時は楽しかったと、いつも言われていたことを思い出す。詩歌と旅をこよなく愛された関場先生であった。

5. 印象深き事件

関場先生の在職中、特に印象的だった事件は、昭和35年の安保騒動と、昭和40年前後の学園紛争である。

昭和35年6月、日米安保条約改定をめぐる、東京は騒然たる状況となっていた。まさに、革命前夜の様でさえあった。当時、関場先生は政経学部長であった。明治大学全体もあの嵐の中で、次第に興奮状態となっていた。授業を止めてデモに参加しようという声が高まりつつあった。

特に、東大の女子学生の樺美智子さんが死体となって発見された直後、明大の空気は一変した。いかなる理由であれ、学生を死なせてはならない、教師はその楯となろうというのである。明大も全学で抗議休校し、デモを行った。私も参加したが、その先頭の1人に、学部長である関場先生の姿も見えた。

それは、第2次大戦中、学生と生死を共にしようとする学徒動員に赴かれた関場先生の姿に共通してはいまいかと思った。戦時中の関場先生のお姿を知らない私ではあるが、あの安保騒動の時、学生を死なせ、傷つけてはならないという悲壮感を感じた。

もう一つの事件は、学園紛争である。主要大学で次から次へと、いわゆる「学園闘争」がおこった。明治大学も例外ではなく、昭和39年11月、農学部的大量入学反対が発火点となって紛争が広がった。政経学部も例外なくこの渦の中にまきこまれた。特に政経学部は、2人の学生の復学問題をかかえていた。正面に立たねばならない学部長は、言うまでもなく関場先生であった。

貴公子と言われた関場先生は、現実問題の処理が決して上手とは言えなかった。私の補佐も十分ではなかった。当時の私は学生部委員で、全学的問題にとりくみ、大学周辺に寝泊りすることが多く、学部のことについて十分に時間をさくことができない状態であった。

ともかく、学生問題の処理を苦手とした関場先生ではあったが、見事なほどのスマートさで出処進退を明らかにして辞任されたのである。古武士のようなさわやかさがここにも見られたのである。

その後の関場先生は、学部行政に二度とたずさわることなく、大学院で研究者の養成に力を注がれた。現在、政治経済学のスタッフの中で、関場先生の薫陶を受けた人は多いはずである。そして、他学部の教授陣でも、関場先生を畏敬している人は多い。

6. 偉大なる教養人

関場先生が世を去られ、いわゆる棺を閉じた。その棺を閉じた時に、人の評価は定まるといふ。

関場先生の評価を、私がすることはできない。弟子が師を評価してはならないという儒教の教えを墨守するつもりはないが、評価しようにも、私はあまりに近すぎて、焦点を定めることはむずかしいからである。

にもかかわらず、私は、関場先生を偉大なる教養人として仰ぎ見てきた。

明治時代に育って、明治大学に奉職した関場先生は反骨の人であった。そして、会津の血がさわぐことを力説されていた。会津生まれのおじいさん子であったというが、同時に長男、次男を喪った父君の溺愛があったものと想像される。それが優しさとなって体質化されたようである。要するに、反骨精神きわめて旺盛な優しい教養人だということである。

精力的な読書家でもあり、書籍の蒐集家でもあられた父君の遺されたものを、長子として受け継がれた関場先生は、古今東西の事情に詳しかった。統計学を専攻された先生でありながら、時には経済史を担当された。教養としての歴史をはるかにこえた歴史の専門家であったと思う。古今東西の文献を渉猟されるということは、終生変りはなく、逝去されるまで、本屋さんとの交際は続いていた。そして、お得意の外国語を駆使されて歴史を解明されつつあったのである。

古今東西の文献に詳しかった関場先生は、ヨーロッパ文明については特に詳しかった。そしてアメリカ文明については、ほとんど関心を示されなかった。ドイツの教養人が、アメリカ人を新興成金とみる傾向があるように、わが関場先生も、アメリカ文明を評価されなかったらしい。

明治大学の在外研究の機会を与えられた私は、人口論研究で活発な米国を選び、南カリフォルニア大学に籍をおいたが、関場先生はおそらく苦々しく思われていたかもしれない。ほんとうなら、西ドイツへという思いでいらしたのではなかったかと推測する。

わが関場先生は、ドイツ語に不自由されなかったせい、生涯、ドイツ語の新しい学問傾向を追求されたようだ。私は英米流のものを好んでいたのだから、ほんとうに不肖の弟子だった。しかし、関場先生は、私の申し出をすべて快く胸のうちにおさめて下さったように思う。

ドイツびいきは、お亡くなりになるまで変りはなかった。ドイツ料理も好まれ、時折、賞味されていたようだが、中華料理を好まれた。そして関場先生が抱かれた中国の文明の理解の深さにしばしば驚かされた。

中国について、関場先生は戦前旅しただけであるという。私の中国旅行は、戦後のみで、しかも、ここ10年そこその間である。けれども、関場先生は中国の詩を愛され、たえず口ずさんでおられた。中国旅行のお土産に墨を差し上げると、ほんとうに喜んで下さった。中国製の筆、すずり、墨、用箋を愛され、どこからか入手されていた。美しい筆跡で詩を書き、時には手紙を書かれていた。私のところにも、数は少ないが美しい毛筆のお手紙と、色紙が何枚かある。それはそれは美しい筆跡である。

かつて政治研究学部が記念論文集を出す時、題字はたいてい関場先生の筆によるものであった。

その偉大なる教養人である関場先生は、戦前の思いが強かったせい、戦後は一度も海外旅行をされなかったと思う。私の記憶にはない。けれども、私が海外旅行をすると、よく聞き役となって下さった。私の最初の旅でもあった北歐のことを申し上げると、ベルリン大学時代、ご自分も学友と旅したことがあることを、ようやく話されるのである。イギリスについても、あるいはフランスについても、私の旅行談を申し上げると、たいてい、すでに知っている地であった。

しかし、私が中東地域の旅の話を書き上げると、エジプトは昔船で行ったよ、

と仰有るのである。戦前の留学のための長い船旅を思い出されるようでもあった。関場先生は、ヨーロッパ、特にドイツを第2の故国と受けとめられていたようである。だから、第2次大戦後、東西にドイツが分かれた、特にベルリンが引き裂かれて対立の拠点となり、壁が設けられたことを知った先生は、青春をふみにじられたようなお気持ちであったにちがいない。

昭和30年代にベルリンを訪れた私は、ベルリン大学を写真でとってきて、プリントをして差し上げた。往時を思い出された関場先生は、淋しそうにじっと見つめておられた。

7. 大いなる遺産

昭和20年代から30年代にかけて、関場先生は人口論と人口統計に、異常なまでの関心を寄せられたことがある。

米国の人口学会を代表する人物に、F.W.ノートスタイン氏がいた。当時、プリンストン大学の教授であった。私は、ノートスタインの主張をフォローし、理論をたしかめるため手紙を出す返事を下さって、今度、東京に行ったら会いましょうということになった。

昭和30年頃の春だったと記憶しているが、ノートスタイン教授は来日され、帝国ホテルから私に連絡があった。ホテルでお会いすると、明治大学を訪ねたという。そこで私は関場先生にお会いいただく準備をした。

明治大学の大学院の研究室へ、私はノートスタイン教授を案内した。応待した関場先生は、美しい英語で語りかけられ、お2人は親しく話された。時折、ドイツ語も混じりあっていた。英語もドイツ語も、お2人の会話についてゆけなかった私は、当時悲しい思いをしたものである。

お2人の会話が終わってから、須美子夫人があらわれ、さらに美しい英会話が展開された。ノートスタイン教授は、須美子夫人に対して、あなたの英語はスウェーデンなまりがありますが……と問われたことが、今も鮮明に記憶に残っている。国際人の1組の夫婦が、米国人教授を相手にしている教養番組のように映じた。

当時、日本人の多くは外国人との交流を苦手としていたし、対等に話せるだけの語学力をほとんど持ちあわせていなかった。国際人ではない私は、羨望の眼で見とれていた。

しかし、天は二物を与えずというが、教養ゆたかな関場先生にも苦手なことがあった。現実の処理が不器用だったことである。

生活の仕方が不器用であり、見るに見かねるほど下手でもあった。戦中戦後派の私は、国際的教養は欠けていたが、生活力だけは逞しかった。だから、戦中派、戦後派から見ると関場先生の生活の仕方は、見てはおれなかった。

貴公子、殿様などの異名を奉られていた関場先生は、たしかに不器用な生きかたをされたと思う。生まれおちた時から何ひとつ不自由せず、人も物もゆたかな中で育ち、ドイツでもおそらく優雅な生活をされて、生活苦をほとんど知らなかったと思われる関場先生は、生涯、生活苦や庶民の感覚を体質的に持ちあわされなかったのではあるまいか。

にもかかわらず、関場先生は、明治大学において、多くの研究者を育て、多くの学生たちに学問とはなにかを身をもって教えられ、さらに数理一遍倒の統計学に社会統計学の学風を主張し、さらに人口論研究の重要性を理解されて支援して下さるなど、公的業績は大きなものがある。特に、政治経済学部スタッフ充実をはかり、カリキュラムを改革して現在の母型をつくり上げられた関場先生の業績は大きなものがある。

私生活の仕方は下手であったかもしれないが、それをはるかに上まわる公的生活を送られ、後世に多くのものを遺されたのである。そのような功績があったのは、ゆたかな教養と、広い国際感覚があったればこそである。つまり、貴公子の風格と力量とがあったればこそ、そうした公的業績を可能にしたと見ることができる。

逝去される1年ほど前、関場先生は入院された。内臓が弱っていたことが判明し、退院後の療養と食生活が、快復の条件だと診断されたようだ。しかし、自由人で、貴公子のような関場先生は、思いのままの生活をされたようだ。そして、本年の春、再び入院ということとなった。

お家族の方々には、生命はそう長くないことを医師は告げたらしいのだが、入院生活をされていた関場先生も、死期をさとっていらしたように思う。偉大なる教養人である関場先生は、少しも乱れることなく、病床で普段と同じように温顔で、私に接して下さった。そして明治大学の将来を案じておられた。

関場先生のほとんど全生涯は、明治大学にあった。そして、明治大学が最も多く困難に苦しんでいた時に、関場先生、その渦中において共に苦しみ、新しい希望へと切り拓いて下さったのである。

お亡くなりになる数日前、関場先生はカトリック教徒となり、受洗されたと聞く。故夫人が信じられた道、そしてお子さまたちが信じてきた道を、自分も歩もうという東洋的な生き方を身をもって示された。

その美し悪しについては批判の余地はあるかもしれない。天国盗人という批判も成り立つかもしれない。しかし、関場先生の優しさ、それに東洋的な教養が、死を前にしてカトリック教徒になったものと私は理解している。

もしそうなら、偉大なる教養人である関場先生は、同時に、偉大なる東洋人でもあったということになる。お家族を愛されていたのであろう。こうした愛の表現をされる関場先生であった。

その関場先生は、生涯を共にされた明治大学をも終生愛しつづけて下さったのではないかと思う。

敬愛する関場先生は、この世にいない。残された明治大学のスタッフは、さらによりよき明治大学、よりよき政治経済学部へと改革の道を進むことが、偉大なる教養人・関場先生のご遺志にこたえる道だと信じている。

亡き師を追想する今、人の世の寂しさを感じず。しかし、人は寂しさや悲しみをこえて、次の世代のために、新しい人生の遺産を築いてゆかねばなるまい。それが亡き恩師の学恩に報いる道でもあろう。